

【結果】 MPC 処理により IOL の接触角は大きくなり疎水性を示した。MPC 処理 IOL では培養後の IOL 表面への接着細胞数がメタンガス・プラズマ処理した IOL や市販の IOL に比べ有意に少なかった。MPC 処理 IOL に接着した細胞は、遠心により容易に脱落し接着性が低く、その細胞に発現する ICAM-1mRNA 量も他の IOL に比べて低かった。

【結論】 IOL 表面を MPC 処理すれば、細胞応答が変化し接着現象が抑制されるので生体適合性を向上させることができる事がわかった。

PE-86.

頭頸部癌切除後の口腔顎顔面の機能と審美的回復—顎顔面補綴の立場から—

(口腔外科学)

○千葉 博茂、里見 貴史、松尾 朗
金子 忠良、北条 了、松田 憲一
續 雅子、蔵口 潤

頭頸部癌の切除によって、口腔や顎・顔面にはさまざまな形態の組織欠損が生じ、嚥下、咀嚼、構音といった口腔の諸機能が障害され、顔面の醜形が生ずることになる。この欠損の部位や大きさによっては、患者の社会生活が著しく制約されるだけでなく、心理的ダメージも計り知れない。特に顔面の組織欠損が周囲の人々に与える不快感や驚きといった心理的影響は患者の対人関係を著しく損ねることになりかねない。そこで、これらの組織欠損を修復し、顔面の審美的回復を図るためにさまざまな方法が講じられる。再建外科手術はその一方法で、骨移植や仮骨延長術、各種の皮弁が利用される。しかし、複雑な形態を有する顔面の修復は困難で、ことに眼球や眼窩周囲の欠損、鼻、耳などの欠損を外科手術で再建しても、患者の満足が得られることは少ない。

近年、人工材料による顎顔面補綴物（エピテーゼ）とこれを維持するための骨癒合型インプラントシステムが著しく進歩し、この二つを併用することが、上記の部位では再建外科手術に代わるもの、あるいは補うものとして期待されている。この方法の利点は再建外科手術に比較して複雑な形態の付与が可能で、色調をある程度自由に調整でき、取り外しが出来るため修理や再製作が可能で、術後の創部の観察が容易である

などが挙げられる。われわれは本方法を利用した顎顔面補綴を近年頻用するようになっており、これによって患者の QOL は飛躍的に改善された。

PE-87.

自発的 HIV 検査の受診動機について

(臨床検査医学)

○尾形 享一、辻川 昭仁、大瀧 学
山元 泰之、福武 勝幸

【目的】 近年、保健所あるいは検査相談室よりの紹介受診が増加している。従来、医療機関側では受診動機として「自発的検査」としてくくってきたが、その真の動機には、身体徴候の存在、リスク行為の認識、啓発活動によるもの、リピーター検査など、様々な要因が考えられる。今回、あらためて「自発的検査」の動機を検討した。

【対象および方法】 2003年1月から2004年7月までの当科新規登録患者156人のうち自発的検査にて陽性と判明した61人（男性60人女性1人、年齢18～52歳（平均年齢30歳））を対象とした。カルテの記載および患者本人からの聞き取りを基に、自発的検査の動機および、その他の STI の合併の有無や背景など自発的検査の要因を検討した。

【結果】 対象者のうち、MSM は60例であり、その全てが何らかのリスク行為を認識していた。動機として、身体徴候の存在を認めた例は19例（31.1%）であり、発熱が9例と最多であった。以下、パートナー・友人の勧め：11例（18.0%）、定期的に検査：8例（13.1%）、啓発活動による：6例（9.8%）などであった。当科初診時の CD4 値は $81 \sim 921/\text{mm}^3$ （平均 CD4 値 $415.8/\mu\text{l}$ ）であり、1例は急性期感染であった。STI 関連抗体陽性者は33例（54.1%）に認め、10例は B 型肝炎・梅毒の共感染であった。

【考察】 MSM HIV 感染者はその性行動における HIV 伝播リスクを認識していたが、STI による HIV 感染リスク増大の認識は低いと考えられた。梅毒等の STI 罹患が HIV 感染効率を飛躍的に高めること、HIV 感染者数に比し STI 罹患者は圧倒的に多数であることを考えれば、新宿等の特定の地域においては、STI 予防・検査・治療に関する啓発が先んじて行われる必要性が高いと思われる。